

## 「いたみ」を共に生きる親子



「さっちゃんのまほうの手」という絵本を読み聞かせると涙があふれることが少なくない。この絵本は、右手に指がない母親が、わが子から「お母さんの手、気持ち悪い」と言われ、ショックを受けたことがきっかけで作られている。

絵本では、ままごと遊びでお母さん役をやりたい右手の指がないさっちゃんが登場する。幼稚園ではいつも背の高いミヨちゃんがお母さん役で、さっちゃんはいつも赤ちゃん役だ。ある日、「今日は、さっちゃん、お母さんやる」とエプロンをサッと取りだした。すると、ミヨちゃんが、「わたしよ、お母さんは。手のないお母さんなんて変だよ」と言い、周りの友だちも同意し、父さん役のあきらくんまで「今日はお父さん、やめた」と言う。

さっちゃんは、「さっちゃんだってお母さんになれるよ」と怒り、ミヨちゃんの髪をひっぱり、髪の毛の引っ張り合いになっていく。先生が止めに入ると、さっちゃんはエプロンはずして投げつけ、そのまま幼稚園を飛び出す。家に着いたさっちゃんは、暗い顔で玄関のドアを開け、母親に「なぜこんな手なのか」と詰問し「こんな手、いやだ、いやだ」と泣く。共に泣きながら、真剣に、本当のことを話すお母さん。

そして、さっちゃんは、翌日から幼稚園に行かなくなる。幼稚園を休んでいる間に、母親が出産し、おねえちゃんになる喜びを覚える。また、父親から「さちこはりっぱなお母さんになれるぞ」「さちこと手をつないでいると元気になるんだ、幸子の手はまるで魔法の手だね」という言葉をもらう。さらに、幼稚園の先生の家庭訪問、謝りに訪ねて来たあきらくんの登場などで気持ちが変わり、幼稚園に行くようになる。

小学2年生の生徒たちは、この物語を真剣に聞いてくれた。読み終わった後、一人の女生徒が、「**気持ち悪いと感じるのは仕方がない**」と発言。私は、その発言に驚き、胸が痛くなったが、それはとても重要な問題提起であった。私は、「・・・気持ち悪いって言っているのかな？」と問いかけた。すると生徒らはこぞって首を振って否定した。

絵本の中で、母親は、指のない娘の右手を両手で包んで「お母さんの大好きなさちこの大事な大事な手なんだから」と涙ながらに話している。そこには娘の心の痛みと共に生きる愛がある。さっちゃんの痛みはわかりやすいが、通常は、人の心の痛みは見えにくい。毎日一緒にいても深い対話なくしては心の痛みは分からない。幸いにもさっちゃんの苦悩は、周りの共感する心を引き出し、皆の学びとなり、幸せへと昇華した。

親子関係に限らないが、人間関係では、相手への理解・共感による「**愛に支えられた辛抱**」が重要だろう。それが、「**気持ち悪い**」と感じてしまう心を超える魔法なのだ。理解できなくても、荒れてしまう心には、**辛抱**で向かうことも必要な事だろう。

(浅野 恵美子)